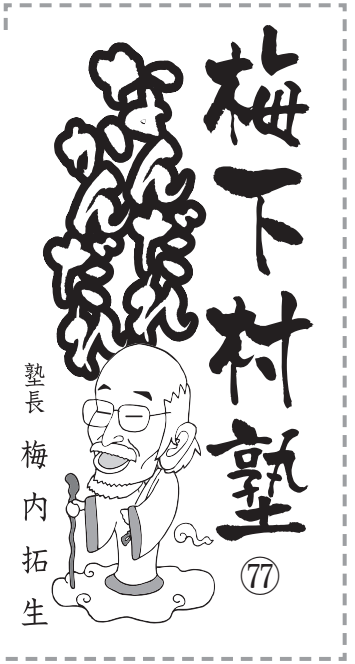
「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～



芭蕉の俳句とセザンヌの絵はつながるか？(5)

日本は世界に冠たる長寿の国である。しかし老いてなを気持ちをシャンと矜持しっかりとして、心豊かな生活を送りたいと多くの人は思っている。

日本には俳句、短歌、川柳などを詠む人が多くいる。本を読んで知ったことであるが、花の都パリでタクシーに乗った時に、日本では俳句や短歌が盛んで、自動車の運転手さんも詠んでいることを話したら、パリの運転手さんは驚いたというのであった。

古いヨーロッパの身分制度の習慣が残っているフランスでは、詩を詠む人は高い教育を受けた人であると考えられているからである。ヨーロッパの知性は哲学、思想、宗教、芸術、歴史など、領域の広さと、深さを備えている。

京都大学教授でフランス文学者であった桑原武夫氏は俳句を「第二芸術」として論じたことがあった。それは、俳句のような短詩形では思想を盛ることが出来ないという主張であった。しかし、この「第二芸術」に対して、日本の俳句界からは堂々とした、反論はなかったことは事実である。

東北大学でも教えていた深い学識と教養を持っていた、桑原武夫氏は石川啄木の詩には感動するものがあると書いていた。「第二芸術」は1971年に出版されている。医学部を卒業して間もない30代の初期の頃に、この「第二芸術」を読んで、俳句は思想を盛ることが出来ないのかと思っていた。

50歳代にWHOジュネーブ本部に勤務していたころに、世界のいろいろな国の人々と俳句のことを話す機会が会った。そのころから、俳句と思想との関係を考え始めた。芭蕉、蕪村、一茶を始めとする江戸時代の俳句には、世界と共有できる思想と芸術の世界を持っていることに気がついた。「梅下村塾」では「芭蕉の句とセザンヌの絵はつながるか？」この考えを述べているのである。

（老いへの思い）の4首から

増田邦夫

火鉢にて豆煮る妻は遠野路の木炭使ふ十年このかた

月山の春の山菜たべたしと賀状にありぬ妹からの

返歌

遠野路の炭と月さん山菜や心豊かに暮らす老い二人

橋爪里見

子に曾孫卒寿の我の祝いにと雪積む湯宿に賑わう一夜

窓越しに眺めて寒き庭の雪ふむこともなく過ごす幾日

返歌

窓越しに月を眺めて暮らす日々卒寿の祝い家族賑わう

古希、卒寿、と年令の坂を越えて、そして近づくと、思い出がつくも積み重なって来る。

吉永小百合とマヒナスターズの「北風」の歌、「北風吹きぬく寒い朝も　心ひとつで暖かくなる…」

この歌のなかの「心ひとつで暖かくなる」、これは、「梅下村塾」の心構えの基本のひとつである。

「山のあなたの空遠く、幸すむと人の言う」、ドイツの新ロマン派の詩人、カールブッセの詩である。ロマンを求めて、出かけて行く西欧文化の心が滲んでくる。

〝起きて見つ寝て見つ蚊帳の広さかな〟、遊女浮橋が詠んだとも、加賀の千代女が詠んだ俳句とも言われている。

古希を越える人々には蚊帳の情緒はわかると思うが、若い世代の人にはなかなかそれは無理だろうと思う。「理想」の追求、「生活の場」と奥にあるものをを感じ取る、西欧文化と我が国の文化の違いである。古希の坂を越えると思い出が深くなって来る。

（東海新報記事から）

2月21日（木）の第五面の「無我にて候　澤木興道とヤマキさん　大船渡市盛町　狩集憲彦」には澤木興道老子の熊本の五高時代のことと、五高の教授をした、夏目漱石の事が述べられている。西欧のエゴイズムと日本の我執、キリスト教と仏教の対応の仕方は共通するものと、そうでないものがあるのは当然である。

イギリス留学をして、ヨーロッパ文化の大きな力に圧倒されて帰国した夏目漱石はエゴイズムと我執との闘いの末にノイローゼになり、これを乗り越えて「則天去私」を掲げて小説を書き続けて、深い意味を潜めている傑作「明暗」を書き上げた。

英文学者である夏目漱石は漢学にも深い知識を持っていた。漱石は中国の陶淵明の詩の「悠然として南山を望む」にあるような理想郷を求めていたようだ。「芭蕉の句とセザンヌの絵はつながるか？」は「無我にて候　澤木興道とヤマキさん　大船渡市盛町　狩集憲彦」のコラムにある、夏目漱石の世界にもつながっている。